自分の〈読み〉をもつということ

足利市立葉鹿小学校　川　﨑　廣　三

私たちが文学的な教材を取り上げて読解指導をするとき、一読者として（教えることを前提としないで）テキストに向かう必要がある。子どもの立場でテキストを読むということである。そこでの反応、すなわちテキストとの創造（想像）的な関わり――テキストに触発されて自分の内に生じる“何か”――を〈読み〉ととらえると、その〈読み〉が一連の指導の原点になるからである。

中村健之介は「小説はさまざまな糸が工夫をこらして織られた複雑な織物であり、その材質、色、模様、織り方の全体が作者の表現だ」（『永遠のドストエフスキー　病いという才能』）という。それらは、教える段階では１つ１つ吟味すべきことかもしれないが、最初の〈読み〉では、テキストと自分の〈あわい〉に意識を集中すべきである。まずは自分の〈読み〉をもつことである。

ただし、指導にあたっては他者の〈読み〉を読むべきである。一読者としての〈読み〉はプライベートなものであり、テキストと自分との間に閉ざされた出来事である。当然偏りがある。それを教室という開かれた（公共の）場に、教師という立場で持ち込むのは危険であり、好ましくない。

また、教師は教材文のすべてに、指導に耐えるだけの〈読み〉をもてるとは限らない。その場合、後でも触れるように、触媒としての他者の〈読み〉が必要である。他者の〈読み〉を読むことで、新鮮で驚きに満ちた〈視点〉や自分とは異質な〈感性〉と出会う可能性が生まれる。そのような〈読み〉の〈読み〉を通して、〈読み〉は深められ、複眼化される。しかし、ここでも自分の〈読み〉がその中核となるのである。このような過程を経て、ハイブリッド化した自分の〈読み〉は、教室でのみんなの〈読み〉の指導にも耐えられるものとなる。

〈読み〉の指導は、子どもの〈読み〉との双方向の交通の中で行われる。〈読み〉は読み手のスキルとともに経験、嗜好、興味、関心、体質、気質等に深く関わる。そこで、教室という場では様々な〈読み〉が披露されることになる。（そうあるべきである。）指導は、子どもという他者の〈読み〉をいかに〈読み〉、それとどう関わるかにかかっている。

そこで重要なのは、“子どもの”という限定を取り払った、一般的な〈読み〉の〈読み〉と変わらない。私たちにとって心に深く響く〈読み〉とは、あるいは豊かな〈読み〉とはどのようなものか。それは、読み手がどれだけ深く（純粋に）テキストに反応したかということであり、どれだけすぐれた（他者の心の深部で反応を引き起こす）触媒となり得るかということである。１人の子どもの心の奥深くで起きた反応は、多くの子どもたちの（教師も含めて）心に響く力をもつし、大勢の子どもたちの〈読み〉の触媒となって、豊かな実りをもたらすことになる。教師は他者（子どもたち）との開かれた〈読み〉を通して、そのような〈読み〉への導き手でなければならない。正しい〈読み〉とか間違った〈読み〉といった、痩せ細った〈読み〉に子どもたちを追い込んではいけない。他者とともに〈読み〉に夢中にさせることである。

それもこれも、すべての出発点になるのが、自分なりの〈読み〉である。

自分の〈読み〉の試み／『ニャーゴ』を読む

物語はネズミの学校の授業風景から始まる。学校は、子どもたちの安寧と幸福を願って、大人たちの長い長

い経験に裏付けられた貴重な知識を伝達しようとする。先生は、黒板に大きくネコの絵を描いて、『いいですか、これが　ねこです。この　かおを　みたら　すぐに　にげなさい。つかまったら　さいご、あっと　いうまに　たべられて　しまいますよ』と話す。

しかし、みんながみんな真面目な生徒とは限らない。どんなに有り難い知識でも百パーセント伝達されるという保障はないのだ。案の定、３びきの小ネズミが授業をサボッておしゃべりをしていた。

そういうものに限って、最悪の事態に遭遇するものだ。ネズミたちはモモを取りにいく途中で、大きなネコにばったりと出くわしてしまう。ネコの恐ろしさを知らないネズミたちは、ことの重大さが分からない。大人たちの教える適切な行動を取れないばかりに、敢えなく命を落とすことになる。

こうなれば、ほらごらん、先生の言うことを聞かない子は、きっとこうなるのよ、という教訓話を１つ残して、ことは終わる。これは、大人たちにとって、火を見るよりも明らかな１本道のプロセスだ。

しかし、知らないというそのことが、思わぬハプニングを生むこともある。

ネズミたちの前に「ニャーゴ」と立ちはだかったネコに、最初に微妙な変調をもたらすのは『おじさん　だあれ？』の一言だった。不意をつかれて、『・・・・た、たまだ』とつい名のってしまう自分のまぬけ加減に、ネコは思わず顔を赤くしてしまうのだ。

聞くと、ネズミたちはこれからおいしいモモを食べにいくという。モモを腹いっぱい食べたネズミは、さらにおいしいご馳走になるに違いない。その誘惑に抗し切れずに、ネコはさっさとネズミを平らげずに、先に延ばすことにする。時間が介入することで、１本道に思わぬ枝道がのびてゆく。人類の文明が、びっくりするほど多様な展開を遂げたように。ネコはただ待っていただけではない。おいしいモモのなっているところまで、“親切”に背中に乗せて、ネズミたちを運んでやった。

授業をサボッたネズミたちには「ニャーゴ」の“意味”も分からない。そこで、３びきのネズミは、顔中を口にして、声をそろえて「ニャーゴ」と叫ぶ。『へへへ・・・・・・たまおじさんと　はじめて　あったとき、おじさん　にゃーご！　って　いったよね。あのとき、おじさん　こんにちは！　って　いったんでしょう。そして　いまの　にゃーごが　さよなら　なんでしょ』。精一杯のネズミの解釈は、まったくのトンチンカン。ネコは、ますます調子を狂わされてしまう。

そして、結果としてネコの思惑を完全にくじくことになったのは、ネコの子どもたちへのモモのプレゼントだった。解釈や思いは、それだけでは現実の力にはなり得ない。他者にインパクトを与え、心を動かし、予期せぬ方向に行動を導くのは、思いのはじけた行為である。ネコが１本道から枝道にシフトしたのも、ネズミたちのとった行為がもとだった。

『おじさーん、また　いこうね』

『きっとだよー』

大事そうにモモを抱えたまま、小さな声でこたえた「ニャーゴ」は、すっかりネズミたちへの返事になっていた。

［引用・参考文献］

中村健之介　『永遠のドストエフススキー　病いという才能』中公新書、2004年

宮西達也　作・絵　『ニャーゴ』鈴木出版株式会社、1997年